拓本調査にもとづく神社と鍛冶屋町の関係分析
―広島県鞆の浦の小烏神社を事例にして―

日本大学　学生会員　○藤山直也
日本大学　　非会員　　野水雅之
日本大学　　正会員　　伊東　孝

１．はじめに

広島県福山市鞆の浦にある小烏神社は鍛冶屋の神が奉られている。しかし、その歴史を伝える文献がほとんどなく、今まで調査が行われたことはなかった。神社の周辺地域は江戸時代、鍛冶屋町で、現在でも「鍛冶町」という地名が残っている。境内には玉垣・鳥居・狛犬などさまざまな石造構造物が奉納されている。

そこで本研究では、神社にある石造構造物の拓本調査と地元の方へのヒアリング調査から、神社と鍛冶屋町の関係を探る。

２．調査方法

神社にある玉垣・鳥居・狛犬・灯籠・石柱などから拓本をとる。拓本は石造構造物が風化などにより文字が見えにくくなったものを紙と墨を用いて写し、その文字を読取りやすくする手法で、博物館学では一次資料として扱っている。

「福山市鞆の浦歴史民俗資料館友の会」の石井六郎氏と池田一彦氏にヒアリング調査をおこなった。

３．小烏神社について

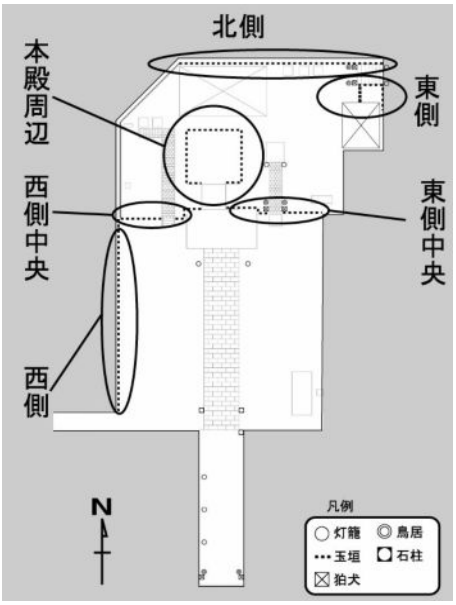
境内にある観光用の説明看板によると、祭神は小烏大神と天目一箇神（あめのまひとつのかみ）（鍛冶屋の神）で、鞆鍛冶の氏神である。

神社は、何回かの火災や台風などで、修復・修繕を繰り返している。現在の社殿は明治 42 年 11 月 18 日に再建された。これは、再建時の記念碑からわかった。社殿は、本殿、弊殿、拝殿の３つの建物にわかれている。神社の周辺（参道付近）には空き地があり、かつては多くの鍛冶屋があったという。鍛冶屋町の一部を切り開いて小烏神社の参道がつくられた。

また石井氏の話と資料によると、小烏神社の元の土地は在番（役所）であった。

４．鞆鍛冶について

奈良時代から船具加工が始まり、南北朝・室町時代には多くの刀鍛冶がいた。江戸時代、福島正則は城下町づくりの一つとして鍛冶屋町をつくった。



図－１　小烏神社の配置と玉垣位置図

表―１　石造構造物種類と数量

玉垣	西側		東側		北側		西側中央		東側中央		本殿周辺	
	親柱	子柱	親柱	子柱	親柱	子柱	親柱	子柱	親柱	子柱	親柱	子柱
数	10	88	3	22	8	77	5	27	9	32	20	87
合計	98		25		85		32		41		107	

玉垣以外	鳥居	狛犬	灯籠	石柱	計
数	4	6	9	2	21

合計	親柱	子柱	全体	総数	拓本
	55	333	388	409	237

小烏神社の周辺の鍛冶町は、鍛冶職人や鍛冶製品を取り扱う問屋が多く居住する町であった。

５．拓本調査結果

石造構造物のうち、玉垣は全体で 388 本あり、そのうち親柱が 55 本、子柱が 333 本であった。玉垣以外では、鳥居４対、狛犬６体、灯籠９本、石柱が２本の計 21 本であった（表―１）。神社の石造構造物の総数 409 体中拓本は、237 枚採ることができた。拓本が採れない箇所は写真や直接目で見て読みとった。このうち全く読み取れなかったのは７本である。ところどころ読み取れるものが数多くあった(33 本)。141 本は何も印されてない玉垣であった。

図－１は、小烏神社の玉垣をグルーピングしたもの

キーワード：小烏神社　石造建造物　鞆の浦

連絡先：〒274-8501　千葉県船橋市習志野台７－24－１　社会交通工学科都市環境計画研究室　ＴＥＬ/ＦＡＸ047－469-5552

で、西側・東側・北側・西側中央・東側中央・本殿周辺の６つに分けた。

（１）玉垣の配置

参道の南側より神社に入ると、3 本の灯籠がある。境内の西側は玉垣で囲まれているが、向かいの東側には玉垣はない。北側と北側寄りの東側にも入口があり、両側に玉垣が位置する。本殿の左右にも玉垣があり、さらに本殿を囲むように玉垣が設置されている。

玉垣から年代を探った結果、西側は明治９年頃に建造されたことが読みとれる。北側も正確な年代は判読できなかったが、「明治」は読みとれた。東側中央は内側が昭和８年、外側が大正 15 年に建造されている。玉垣の中で最も古い時代に建造されたものは享和３年（1803）の銘のある東側であった。東側の入口はかっての旧参道であり、神社の配置は現在と大きく違っていたと推測される。

（２）西側の玉垣

西側の玉垣は全部で 98 本あり、その内 64 本（65.3%）の玉垣に寄付金の額が記されている。また親柱は 10 本で、子柱は 88 本である。金額は全体的に親柱に多額の金額が記され、子柱は少ない。ちなみに 10 本の親柱のうち、金額が記されているのは６本あり、150 円（１本）、50 円（３本）、20 円（１本）、10 円（１本）となっている。また子柱 88 本のうち、55 本に金額が書かれ、興味深いことに中央部分の子柱に一番高い金額が印されている。

（３）北側の玉垣

北側の玉垣には「氏子中」という文字がまとまって配置されている(23 本)。しかし、この場所に設置された理由は不明である。また、北側 85 本中屋号の彫られているのは７本で、うち３本が（親柱１本、子柱２本）が鞆である。

（４）東側の玉垣

東側の玉垣には多くの屋号が印され、前述したように江戸時代の玉垣である。鞆の屋号とそれ以外の地域の屋号が印されている(25 本)。鞆の屋号は 6 本あり、鞆以外の屋号は 12 本あった。この位置は昔、参道であり、一種の広告効果として、ここに設置されたのではなかろうか。

（５）西側中央の玉垣

西側中央には 32 本の玉垣があり、うち５本が親柱、27 本が子柱である。親柱にはすべて屋号、名前ないし金額が印されている。一方子柱は 16 本に屋号や名前が印され、興味深いことに西側４本は玉垣の裏に屋号や名前が印されている。これは玉垣のつくられた年代や職人の違いによるものなのだろうか。また鞆の屋号は３本あり、いずれも子柱で表面に陰刻されている。

（６）東側中央の玉垣

東側中央は、親柱のみに文字が印されていた。内容としては、西側中央と違って裏側には人名と建造された年月日が記されており、表面にはすべて「小烏請中」と印されている。子柱 32 本には何も印されていない。

（７）本殿周辺の玉垣

玉垣から大正７年に建造されたことが読みとれる。他の場所と比べ玉垣の配置は比較的規則性がある。玉垣の印されている内容に、本殿を中心とした、左右対称の規則性が見られる。ここの玉垣には「村上」と印されているものが多く（１４本)、さらに地域名で大阪と印されているもの多い(15 本)。これより、小烏神社と大阪との関係性が考えられる。例えば、同時代に繁栄していた大阪の鍛冶職人が小烏神社に寄付をしたと推測できる。

６．おわりに

小烏神社の玉垣調査から、以下のことが判明した。

１．参道は、北側から入る現在の参道の他に、江戸時代には東側から入る参道があり、25 本の玉垣が残っていることも判明した。これから、江戸時代と現在とでは神社の配置が大きく異なることが類推できる。

２．東側の江戸の享和年間につくられた玉垣以外は、いずれも明治以降に築かれた玉垣である。

３．玉垣には、竣工年や寄進者名・出身地・屋号・寄付金額などが陰刻されているが、それらの陰刻が一番多い玉垣は西側部分にみられた。しかも親柱に刻まれた額は、子柱より多く、列をなす子柱では、中心部分に高い金額の子柱を設置している。

４．本殿周辺の玉垣からは、小烏神社と大阪との関係性が読みとれた。また鞆の人が寄進した玉垣は、現在のところ西側３本、北側３本、東側６本の計 12 本が判明している。

以上から、文献資料がなくても、石造構造物の判読から、ある程度の歴史解読は可能であることがわかる。

今後、さらに玉垣を解読して、小烏神社と鍛冶屋町や鞆との関係、さらには他地域との関係を解明したいと思う。